研究ノート

韓愈「秋懐詩」をめぐって

牧角悦子
和久希

はじめに

「文公」と謚（おくりな）された韓愈は、文字通り「文」の意義を体現した人物である。古学にも宋学にも繋がる思想史上の結節点としても、古文と駢文という「文」の転換の提唱者としても、そして杜甫を発見し詩を文学の主流に押し上げた詩人としても、その文化史上の位置は極めて大きい。しかし同時に、思想・文学・文化という近代的な概念での説明を超えて、その生き方と表現とが、圧倒的な力を持って読む者に肉迫する稀有の存在でもある。

筆者（牧角）は個人的には中国の詩人の中で韓愈に最も惹かれる。それは詩人としてである。因って本学の授業で長く文学史を講じてきた中で、常に韓愈を文の画期と位置付けてきた。一方、本年度から非常勤講師として唐・宋の文学と中国文学概論の担当をお願いしている和久講師は、中国中世の言語思想を専門とする若手研究者である。和久講師もまた、表現と思想の相関を哲学的体系の中で捉えようとする自身の問題意識の中で、韓愈に大きな興味を覚えていることを知った。牧角は文学史或いは詩人の存在意義という視点から、和久は表現と思想の関係という視点から、方法論を異にしながらも韓愈の

大きな個性に対して他とは異なる格別の思いを共有しているのだ。そして、牧角が韓愈を折り返し地点として中国文学史を講じたように、和久もまた本学の講義（「中国文学研究③④」）の中で韓愈を中心に思想と文化、そして表現の背景への志向を講じ、それらは学生の深い興味を喚起している。

本稿はこのような背景のもと、主に和久が講義のために準備した韓愈「秋懐詩」の基本資料（講義ノート）を「ノート」として提示した上で、牧角が文学史的視点から一つの話柄を提供する。

中国古典には、近代的「文学」とは多少異質の性格がある。古典的「文」の代表格である韓愈を対象に、そのアプローチの一端を紹介することが本論の主旨である。

なお、以下「韓愈『秋懐詩』ノート」は和久、「秋懐の系譜――阮籍・韓愈・魯迅――」は牧角の執筆に繋る。

Ⅰ　韓愈「秋懐詩」ノート

和久　希

■解題

「秋懐詩」全十一首は、韓愈による五言の連作詩である。表題の通り、秋という季節の中で、自身の思い（懐）を述べたものであり、方世挙『韓昌黎詩集編年箋注』によれば、元和七（八一二）年秋、韓愈四五歳の作とされる（ただし、元和元年やそれ以前に制作されたという説もある）。元和六年、韓愈は河南から上京して尚書職方員外郎の地位を得たが、翌元和七年二月、ふたたび国子博士に左遷された。それゆえ、韓愈の内面には時流に従うことと本来的な自己を貫くこととの葛藤があり、それらが本詩の主題をなしているとされる。ただし本詩には、単なる出仕／隠逸という二項対立には回収されない、読書への沈潜を志向する視座がある（其三～其五）。ところが、それは現実とのあいだに新たな揺動をもたらし、ついに絶対的な他者

「童子」の出現により、破綻を迎えてしまう（其八）。そして、本来的な自己とのさらなる葛藤の果てに、沈黙による天命の受容（其十一）に至るのであった。

本ノートでは、以下の問題意識にもとづきつつ、連作詩としての「秋懐詩」全十一首の全体を把握するための基礎的検討をおこなう。韓愈詩の引用は、銭仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』（上海古籍出版社、一九八四年）にもとづき、各本を参照した。

■問題意識

・秋：古代中国の主要産業は農業であり、秋は収穫の季節であった。そしてそれは、豊かな実りを祝福する時期でもあった。その一方で、中国文学史においては、古代より秋を悲しむ伝統があった。『楚辞』九辯の冒頭には「悲哉秋之為気也、蕭瑟兮草木揺落而変衰」との言がある。植物の衰亡をめぐる描写は、往々にして悲哀の情と結びつけられてきたが、さらには、人生の短さ、自身の有限性の自覚をもたらすものでもあった。自身の有限性とは、時間が不可逆であり、その中で自分がすでにある程度のところまで無自覚に進んできてしまったことに気づいた、ということを意味する。文学史上の秋を悲しむ伝統は、その後、潘岳「秋興賦」、謝恵連「秋懐」、杜甫「秋興」などに引き継がれていく。このような系譜に連なるものとしての韓愈「秋懐詩」の特色とはどのようなものか。

・懐：韓愈「秋懐詩」には、上述した秋を悲しむ伝統とは別に、もう一つ、文学史上の異なる伝統が流入している。つとに夏敬観「説韓」が指摘するように、それは「詠懐」の伝統である。阮籍「詠懐詩」其一に見えている「現実」と「文学」との二重の関係（大上正美『阮籍・嵇康の文学』創文社、二〇〇〇年）、あるいは庾信「擬詠懐詩」其一に見えている「方法としての自虐」と「自己剔抉」（大上正美『六朝文学が要請する視座――曹植・陶淵明・庾信』研文出版、二〇一二年）とをふまえ、「詠懐」の伝統から韓愈「秋懐詩」がいかにして表現を獲得しているのだろうか。

■其一

【原文・訓読】

1 牕前両好樹　　牕前の両好樹
衆葉光蕤蕤　　衆葉　光りて蕤蕤たり
秋風一披払　　秋風　一たび披払すれば
策策鳴不已　　策策として　鳴りて已まず
5 微燈照空牀　　微燈　空牀を照らし
夜半偏入耳　　夜半　偏(ひとえ)に耳に入る
愁憂無端来　　愁憂　端無くして来たり
感歎成坐起　　感歎　坐起を成す
天明視顔色　　天　明かりて　顔色を視れば
10 与故不相似　　故(もと)と　相い似ず
羲和駆日月　　羲和　日月を駆くれば
疾急不可恃　　疾急にして恃むべからず
浮生雖多塗　　浮生　多塗なりと雖も
趨死惟一軌　　死に趨(はし)るは　惟だ　軌を一にす
15 胡為浪自苦　　胡為(なんす)れぞ　浪(みだ)りに自ら苦しまん
得酒且歓喜　　酒を得ては　且(しば)らく歓喜せよ

【語釈】

○蕤蕤：さかんに茂るさま。『広雅』釈詁に「蕤蕤、茂也」とある。『毛詩』小雅「甫田」には「或耘或耔、黍稷蕤蕤」とある。○披払：吹き払うこと。『荘子』天運に「風起北方、一西一東、有上彷徨。孰嘘吸是、孰居無事而披払是」とある。○策策：擬音語。秋風が木の葉を揺らす音。ざわめき。○空牀：誰もいない寝床。○無端：端緒がないこと。きっかけをもたずに、なんとはなしに起こる様子。○坐起：寝床から起き上がること。阮籍「詠懐詩」其一の冒頭に「夜中不能寐、起坐弾鳴琴」とある。なお「古詩十九首」其十九にも「憂愁不能寐、攬衣起徘徊」との言がある。○顔色：様子。夜が明けたのちの衆葉の姿を指す。○羲和：『山海経』大荒南経の郭璞注に「羲和蓋天地始生、主日月者也」とある。○浮生：定まるところなく、はかない人生。『荘子』刻意に「其生若浮、其死若休」とある。○多塗・一軌：『周易』繫辞下伝に「天下同帰而殊塗、一致而百慮」とある。○浪：みだりに。○且：しばらく、かりそめに。

【現代語訳】

（1・2）窓の前には二本の好ましげな樹が見えていて、（夏になると）諸々の葉が光り輝きながら生い茂っている。（3・4）やがて秋風がひとたびやってきて、それらの葉を吹き払おうとすると、（衆葉は）ざわざわと音を立てて、鳴り始めては止むことがない。（5・6）微かな灯火が誰もいない寝床を照らしていて、真夜中になると（秋風のざわめきが）ことさらに耳に飛び込んでくる。（7・8）（そのような状況において）漠然と憂いに沈むような気持ちがどこからともなくこみ上げてきては、その感慨は深夜、私を寝床から起き上がらせてしまったのだ。（9・10）空が明るくなってきて、あらためて窓の前の様子に目を向けてみると、（衆葉は一晩のうちに）かつての姿とはすっかりかけ離れて（散り落ちて）しまった。（11・12）羲和が（常に）太陽や月を御しているので、（季節の移り変わりはいつも）迅速であって、（不変なるものとして）拠りどころとすることができない。（13・14）（そのような時間の推移の中にあるのならば）人生にはさまざまな道があるとはいうけれど、死に向かっているという点のみについてみれば、誰もが軌を同じくしているのだ。（15・16）（そうであるならば、現実

の喜怒哀楽はすべてかりそめのものにすぎないのだから）どうしてむやみに自ら苦しむことがあろうか。酒を飲みながら、しばらくは（俗世間の）歓喜の中にいるよりほかにないではないか。

【解説】

1句目～4句目は、窓の前にある二本の樹木の姿を対比的に描写している。生命力豊かに生い茂る夏の葉は視覚的に捉えられ、一方で枯れ落ちる秋の葉は聴覚において把捉される。これらはいずれも事態をそのまま描写しており、客観性の高い記述であるが、その背後に、衰亡へ向かう時間の推移をめぐるざわめき、あるいは漠然とした不安を想起させるものである（もちろんそのざわめきは、直接的には元和七年の韓愈を取り巻く人事的状況の変化を述べるものとしてもよい。その場合には、自身の栄達を求めつつも卑職にあることを枯れ落ちる秋葉に重ねた、と理解できる）。続く5句目～8句目は、秋の夜の情景が、個人的な実感をともなって述べられている。5句目の視覚描写は1・2句目、6句目の聴覚描写は3・4句目に対応する。また、主体的に聴くのではなく、耳に飛び込んできた秋風のざわめきは、7・8句目に見えている「詠懐」の起点となっている。ただし、ここでは阮籍「詠懐詩」と同様、憂いをもたらすものが具体的に示されていない（無端）。すなわち焦点化されることのない現実の全体が「詠懐」の契機なのである。秋とは、夜が次第に長くなる季節であり、その時間の長さは物思いの長さ、内省の深さを示唆している。しかし本詩では、「坐起」したのちの思索や行為が具体的に語られることはない。

9句目～12句目は、翌朝の光景とそれにもとづく思索を述べている。8句目と9句目のあいだ、すなわち深夜から翌朝までに関する言及はない。そして翌朝、窓の外の世界は一変している。11・12句目では、衆葉の散り落ちた光景を眼前にしながら、そのことを抽象化して、理知的に言及する。季節の推移は、羲和が天体の運行をつかさどっているがゆえに迅速なのであって、一カ所にとどまっていることができないのである。13・14句目は前句をうけて、時間の不可逆的な進行を前提としながら人生観を披瀝する。人々には多様な生きかたがあるとはいえ、死に向かって進んでいるという点について見れば、誰もが同じレールの上にある。これは、時間の推移の中における人間の有限性を述べる点で、ひとつの諦念を示している。そのこ

とを引き受けたうえで、しかし15・16句目には、単なる諦念とは異なった視座が見えている。誰もが死に向かっているからこそ、ことさらに苦しむ必要はない。この「浮生」において、酒を飲み、かりそめに楽しむほかにない、というのである。本詩では、死を前提としながらも、現実の人生を見据えるというほどのことではなく、浮世に流されるままにあることを肯定的に捉えようとする視点が提起されている。

■其二

【原文・訓読】

1白露下百草　白露　百草に下り
蕭蘭共雕悴　蕭蘭　共に雕悴す
青青四牆下　青青たり　四牆の下
已復生満地　已に復た　生じて地に満つ
5寒蟬暫寂寞　寒蟬　暫く寂寞たり
蟋蟀鳴自恣　蟋蟀　鳴きて自ら恣たり
運行無窮期　運行には　窮期無きも
稟受気苦異　稟受には　気　苦だ異なる
適時各得所　時に適いて　各おの　所を得れば
10松柏不必貴　松柏　必ずしも貴からず

【語釈】

○白露～：『楚辞』九辯に「白露既下百草兮、奄離披此梧楸」とある。また『礼記』月令・孟秋之月に「涼風至、白露降、寒蟬鳴」とある。○蕭蘭：蕭（ヨモギ）はつまらないもの、蘭は高潔なもの。○雕悴：枯れ萎む。○青青～：「古詩十九首」其二に「青青河畔草、鬱鬱園中柳」とある。○四牆：四方の垣。○寒蟬～：寒蟬は、ヒグラシ。『楚辞』九辯に「燕翩翩其辞帰兮、蟬寂寞而無声」とある。○蟋蟀～：蟋蟀は、コオロギ。『楚辞』九辯に「澹容与而独倚兮、蟋蟀鳴此西堂」とある。○稟受：天から受けること。『淮南子』修務訓に「各有其自然之勢、無稟受於外」とある。また『淮南子』原道訓には「夫道者、覆天載地、廓四方、柝八極、高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形」との言もある。○苦：はなはだ。○各得所：『周易』繫辞下伝に「日中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所」とある。○松柏：常緑樹。『論語』子罕篇には「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也」とある。

【現代語訳】

（1・2）うるわしい露が諸々の草の上に降り注ぐと、（季節がめぐり）蕭も蘭も時を同じくして枯れ萎んでしまう。（3・4）（それでももう一度春が訪れると）四方の塀のもとに青々として、すでに（かつて枯死した草たちが）ふたたび生じて、地を覆うかのようである。（5・6）（晩夏には盛んに鳴いていた）ヒグラシが（秋になって）にわかにその声を潜めたところで、（入れ替わるようにして）コオロギが思いのままに鳴きだしている。（7・8）（天体の）運行には、きわまりとどまるところがないけれど、（その天から万物が）稟受する際の（それぞれが与えられる）気には大きな隔たりがある。（9・10）（そのような差異を前提としながら）その時宜に応じるようにして（万物が）各々、その適切な場所を得ることができるならば、（春まで葉を落とさない）松や柏であっても、必ずしもそれらが貴いということにはならないのだ。

【解説】

1・2句目は、「秋懐詩」其一に「浮生雖多塗、趨死惟一軌」とあるような死生観を述べたものである。さまざまな植物

は、露をまとう季節になると枯れてしまう。それと同様に、人々もまた死に向かう存在である。ここでは、直線的で不可逆な時間の中で、万物が一様に死にゆくものであるということを一般論として述べ、導入としている。ところが3・4句目以降には、時間に関して、前句とは異なる視座がある。すなわち、循環的な時間が提示されるのである。秋に枯れた植物は、春になってふたたび芽生える。あるいは、ヒグラシの声が止んだ晩夏には、コオロギが鳴き出す。このように、各々が（個体としては）移り変わりながらも、その時々に応じた展開が繰り返されているのである。このことを本詩では、鮮やかに芽吹いて地を覆う春の植物、ほしいままに声を響かせる秋の昆虫を取り上げ、視覚・聴覚にわたって提示している。

7・8句目では、万物の相対性を担保する普遍者として、天体の運行が提示される。ただし、万物は普遍者を根拠とするにもかかわらず、それぞれに相対的差異を有している。それは、天から稟受する「気」（万物の構成要素、質料）の配分・調合が異なっているからである。したがって9・10句目では、まずは万物の相対性を認めたうえで、各々あるがままに適宜適切にあることを希求する。そしてそうである以上、秋に葉を落とさない松柏は、必ずしも羨望の対象とはならないことを述べる。本詩ではこのようにして、直線的な時間と生命の衰滅ということが観念的に克服されている。それは、松柏のようにあろうとするのではなく、あくまでも各々の差異を前提としながら、それぞれに自足するということである。

■其三

【原文・訓読】

1彼時何卒卒　彼の時　何ぞ卒卒たる
我志何曼曼　我が志　何ぞ曼曼たる
犀首空好飲　犀首（さいしゅ）は　空しく飲を好み

廉頗尚能飯　廉頗は　尚お能く飯す
5学堂日無事　学堂は　日に事無く
駆馬適所願　馬を駆けて　願う所に適かん
茫茫出門路　茫茫たり　門を出づるの路
欲去聊自歎　去かんと欲すれども　聊か自ら歎く
帰還閲書史　帰還して書史を閲すれば
10文字浩千万　文字は　浩として千万
陳跡竟誰尋　陳跡　竟に誰か尋ねん
賤嗜非貴献　賤嗜は　貴献に非ず
丈夫意有在　丈夫　意　在ること有り
女子乃多怨　女子　乃ち　怨み多し

【校勘】

○欲去聊自歎　底本は「欲去聊自勧」に作る。祝本（祝充『音注韓文公文集』）、魏本（魏懐忠『新刊五百家注音辨昌黎先生文集』）にしたがって「勧」を「歎」に改めた。

【語釈】

○卒卒：切迫しているさま。司馬遷「報任少卿書」に「卒卒無須臾之間」とある。○曼曼：遠大であるさま。『広雅』釈詁に「曼曼、長也」とある。○犀首：古代の官名。ここでは戦国時代・魏の犀首であった公孫衍を指す。『史記』張儀列伝によれば、楚の使者である陳軫が公孫衍に「公何好飲也」と訊ねたところ、彼は「無事也」と返答し、閑職にあってなすことがない現況を訴えた。○廉頗：『史記』廉頗藺相如列伝には、魏に逃れた廉頗の能力を測ろうとして趙王が使者をやったところ、

使者が「廉将軍雖老、尚善飯」と報告したことが載る。廉頗は年老いてもなお、自身が有用な人材であることを周囲に誇示していたのである。○茫茫：遠く遙かに隔たっていて、判然としないさま。○聊：わずかに。○陳跡：先人の残した痕跡。足跡。『荘子』天運に「夫六経、先王之陳迹也。豈其所以跡哉」とある。○女子～：『論語』陽貨篇に「子曰、唯女子与小人為難養也。近之則不孫、遠之則怨」とある。

【現代語訳】

（1・2）時間（の推移）というものは、どうしてこんなにもせわしなく過ぎ去ってしまうものなのだろうか。（それに対して）私自身のもつ志は、どうしてこんなにも遠大なものなのだろうか。（3・4）（そのような不均衡な状況を前にして）犀首（であった公孫衍）は（かつて）空しく酒を飲むばかりであって、廉頗はそれでもまだ、たくさんの飯を食らって事態に備えていた。（5・6）（私の勤務先の）学堂では、日々、とりたてて物事が起こるわけでもなく、（ときに）馬を走らせて思うがままに行こうとする気持ちもある。（7・8）（しかしいざ）門の外へ出るとなると、道は遙か彼方まで茫洋としていて、進みたいと思う気持ちはあるがかなわずに、わずかに自ら嘆くほかにない。（9・10）（そういうわけで）部屋に戻って文献を読み始めたところ、（書籍の）文字はきわめて数が多くて、計り知れないほどであった。（11・12）（そのように膨大なまでの）先人の残した痕跡など、今になって誰が尋ね求めるだろうか。私はそれを好んでいるけれども、それは決して他者に勧められるほどのものではない。（13・14）（しかしそれでも私が書籍を愛好するのは）一人前の男としての自覚にもとづくものである。女性が（遠ざけられた際に）不満を口にするのとはわけが違うのだ。

【解説】

1・2句目は、過ぎゆく時間の早さに対して、自身の志が広大・遠大であることを述べる。人生は、志を果たすにはあまりにも短いというのである。これは、たとえば『荘子』養生主に「吾生也有涯、而知也無涯」とあり、「古詩十九首」其十五に「生年不満百、常懐千歳憂」とあるような認識と同種のものである。3・4句目は、そのような限られた時間、限られた生

涯において対称的に生きた二者を挙げる。閑職にあった公孫衍は、ひたすらに酒を飲むことで不満を表明し、他国へ逃れた廉頗は、老いてなお旺盛に飯を食らうことで事態に備える姿勢を示した。これらの態度を引き合いに出しながら、5句目以下では、はじめて韓愈自身の具体的状況が語られている。左遷されて就いた国子博士の任は、多忙というほどのこともない。それゆえ、公孫衍のようにも廉頗のようにも振る舞えるのだが、彼の志は、当初、思うがままに馬を走らせるというものであった。これは「詠懐詩」を著した阮籍が、ときにあてもなく車を走らせては、道の途絶したところで引き返し、慟哭しながら戻ってくるという逸話にもとづいている（『晋書』阮籍伝）。ところが7・8句目によれば、実際に馬を走らせることはなかった。門の外は茫漠として、駆け出そうにもかなわず、ただ嘆くばかりだったのである。ここには阮籍を思慕しつつ、そのようにあることのできない自己への言及がある。そしてそれは、庾信「擬詠懐詩」其一が「歩兵未飲酒、中散未弾琴」と述べ、阮籍・嵇康のようにあることのできない自己を見据える契機としたことと親和性がある。

現実（出仕）の栄達、逸脱（隠逸）への志向、そのいずれもが果たされない状況において、9句目以下では、それらとは異なる態度が提示されている。それは世塵に積極的に参与するでもなく、きっぱりと現実を拒絶するのでもなく、読書へ沈潜するというものであった。書籍とは、先人の痕跡である。現実のことごとを最優先する立場にあっては、膨大な文献は必ずしも重要視されない。それゆえ書史を閲することは、自身の密かに愛好するところであって、他者に勧められるような行為ではない。けれども読書とは、書かれた文字（痕跡）を通じて先人に通暁するための営為でもある。12句目では「賤嗜」「貴献」との語で自身を卑下しているが、それゆえにこそ、ここに反俗的で強固な自意識を認めることができる。実際に、続く13・14句目では、かかる強い自意識が明確に吐露されている。読書への沈潜は、士大夫としての強い自覚にもとづくものだったのである。本詩にあっては、過ぎゆく季節を哀惜する表現は、冒頭二句にとどまる。そしてその表現は、単に老衰や死を恐れ嘆くものではなく、志の果たし難さを主眼とする点に特徴がある。彼の士大夫としての志は、出仕と隠逸という二項対立に回収されるものとは異なり、読書への沈潜を志向するものであった。

■其四

【原文・訓読】

1 秋気日惻惻　秋気　日(ひび)に惻惻たり
秋空日凌凌　秋空　日に凌凌たり
上無枝上蜩　上には　枝上の蜩　無く
下無盤中蠅　下には　盤中の蠅　無し
5 豈不感時節　豈に時節に感ぜざらんや
耳目去所憎　耳目　憎む所を去る
清暁巻書坐　清暁　書を巻きて坐すれば
南山見高棱　南山　高棱を見(あら)わす
其下澄湫水　其の下の澄湫の水に
10 有蛟寒可罍　蛟(みずち)有り　寒くして罍(あみ)すべし
惜哉不得往　惜しい哉　往くことを得ず
豈謂吾無能　豈に吾に能くする無しと謂わんや

【語釈】

○秋気：秋の様子。『楚辞』九辯に「悲哉秋之為気也、蕭瑟兮草木揺落而変衰」とある。○惻惻：痛ましいさま。潘岳「寡婦賦」に「庶浸遠而哀降兮、情惻惻而彌甚」とある。○凌凌：高々としているさま。○蜩：大蝉。『毛詩』豳風「七月」に「五月鳴蜩」とある。○盤中蠅：皿に群がる蠅。○南山～：南山は、終南山を指す。なお、韓愈には「南山詩」があり、そこ

には「晴明出棱角、縷脈砕分繡」との言がある。○澄湫水～：終南山には炭谷湫という名の池があり、そこには蛟（蛟龍）が住むとされた。韓愈「南山詩」には「因縁窺其湫、凝湛閟陰罾」との言がある。○蛟：蛟龍。みずちのこと。○罾：魚網。

【現代語訳】

（1・2）秋の様子は、日々（深まるごとに）痛ましくなり、秋の空は、日々（澄みわたって）高々として見える。（3・4）上を見れば、枝の上で鳴いていた蝉がいなくなり、下を見れば、皿に群がっていた蝿もいなくなっている。（5・6）どうして季節（の推移）というものに心を動かさないでいられるだろうか。耳目に煩わしかった蝉や蝿がいなくなったのだ。（7・8）清々しい秋の朝、読み終えた書物を巻いて座り直すと、（遙か彼方には）終南山が高く聳え立ち、その稜線をあらわしている。（9・10）その麓にある澄みわたった炭谷湫には蛟龍が棲んでいて、水が澄んでいるから魚網で捕らえられそうだ。（11・12）（しかし）残念なことだ。実際にそこまで行くことがかなわない。（状況が許さないのであるから）決して私自身に（蛟龍を捕らえるだけの）能力がないなどとは言わないでくれ。

【解説】

「秋懐詩」其一は、初秋の光景と胸懐とを述べるものであった。それから時間が進み、本詩では、秋の深まった様子が描かれている。これは、連作詩の中に時間的展開があることを示すものである。1句目～4句目では、実際の生活の中から秋の深まりに思いを致しており、それをうけて5・6句目には、季節の変化を喜ぶ表現が見えている。3句目以降には植物や自身の衰亡に関する言及はなく、そのことは、文学史上の秋を悲しむ伝統から乖離しているかのようである。それゆえか、本詩はとくに韓愈の具体的状況、すなわち憲宗期の朝政における混乱と結びつけながら解釈されてきた。耳目に煩わしい蝉や蝿は、讒言をなす喧しい知識人たちを指すというのである。そしてそれらが不在であることによって、「秋懐詩」其三に示されたような、読書への沈潜が果たされるのであった。

また、7句目以降、終南山を眺めやりながら炭谷湫に棲む蛟龍を連想する点には、これまでとは異なった創造性が認められ

る。7・8句目は「清」「高」といった語を用いつつ、澄みきって見通しのよい秋の朝の情景を述べる。その清澄なさまを接点として、9・10句目では、澄みわたった炭谷湫の水面という想像の空間が開示される。そして、そこには蛟龍が棲むという伝説があるが、水面の鮮明なこの時期ならば蛟龍を捕らえることができるかもしれないと連想を広げているのである。ただし、実際に炭谷湫を訪れて蛟龍を捕らえることはない。11・12句目には、それはあくまでも機会を得られないということであって、捕獲する能力がないのではない、との主張がある。これについては、韓愈の具体的状況に重ねながら、自身の不遇は時宜にかなわなかったためであり、必ずしも彼自身の能力に問題があるわけではないとの認識を示すものである、という解釈がなされてきた。しかし、前半部の蝉や蝿を現実の官界の煩わしさととるならば、後半部、炭谷湫の蛟龍は隠逸生活を暗示しているといえよう。すなわち本詩は、単に官界を拒絶する意志をあらわすのみならず、その一方で隠逸生活に向かう状況にないことを述べており、その意味において出仕／隠逸の二項対立にはおさまらない志向性を示すものであるといえる。

■其五

【原文・訓読】

1 離離掛空悲　　離離として　空悲を掛け
感感抱虚警　　感感として　虚警を抱く
露泫秋樹高　　露は秋樹の高きより泫(したた)り
虫弔寒夜永　　虫は寒夜の永きを弔う
5 斂退就新懦　　斂退しては　新懦に就(つ)き
趨営悼前猛　　趨営しては　前猛を悼む

帰愚識夷塗　愚に帰りて　夷塗を識(し)り
汲古得脩綆　古を汲むに　脩綆を得たり
名浮猶有恥　名の浮なるは　猶お恥ずること有り
10味薄真自幸　味の薄なるは　真に自(みずか)ら幸いとす
庶幾遺悔尤　庶幾(こいねが)わくは　悔尤を遺(わす)れ
即此是幽屏　即ち此に是れ　幽屏せん

【語釈】

○離離：散り散りに引き裂かれること。『楚辞』九歎「思古」に「曾哀悽欷心離離兮、還顧高丘泣如灑兮」とあり、王逸注には「離離、剥裂貌」とある。○空悲：とりとめのない悲しみ。○慼慼：憂うさま。『広雅』釈詁に「慼慼、憂也」とある。○虚警：いたずらにびくびくすること。顧炎武『日知録』は、典拠として陸機「歎逝賦」に「日望空以駿駆、節循虚而警立」とあることを指摘するが、方世挙『韓昌黎詩集編年箋注』はこれを非妥当として「大抵警猶驚也。乃慼慼焉時懐怵惕耳」と述べる。○泫：したたる。涙がこぼれ落ちる。○斂退：身を退けること。○新懦：新たに選んだ惰弱な生き方。○趨営：奔走すること。○前猛：かつて雄大な志を有していたこと。○夷塗：平らかな道。張衡「西京賦」に「襄岸夷塗、脩路陵険」とあり、薛綜注には「夷、平也」とある。○脩綆：長い縄。『荘子』至楽に「綆短者、不可以汲深」とあり、郭象注には「綆、汲索也」とある。○名浮：実質のともなわない名声。『礼記』表記に「恥名之浮於行也」とある。○味薄：無味淡泊であること。『老子』第三十五章に「道之出言、淡乎其無味」とあり、『老子』第六十三章には「為無為、事無事、味無味」とある。○悔尤：後悔・過失。『論語』為政篇に「多聞闕疑、慎言其余、則寡尤。多見闕殆、慎行其余、則寡悔。言寡尤行寡悔、禄在其中矣」とある。○幽屏：隠居すること。曹植「出婦賦」に「遂摧頽而失望、退幽屏於下庭」とある。

【現代語訳】

（1・2）（自己の理想が果たされずに）理想と現実のあいだで引き裂かれ、とりとめのない悲しみが胸に去来して、憂いをおびたままに、いたずらに萎縮しているかのようである。（3・4）（そのような思いを抱きながら見上げると）露が秋の樹の高いところから涙を流すように落ちてきて、虫の声は寒々とした秋の夜を弔うかのように響きわたっていた。（5・6）（これまでは）身を小さく折りたたむようにして、新たに惰弱な生き方を選びとることもあった。（また一方で）世の中に奔走して栄達を求め、先に遠大な志を有していた自己を不憫に思うこともあった。（7・8）（しかし今は、俗世間から見れば）愚鈍な生き方に回帰することで、平穏な道を歩くことができるようになり、（そのうえとうとう）古典文献に耽溺しようとして、古人の思索をたぐり寄せるための長縄を手に入れたのである。（9・10）実態のともなわない名声であれば、（心ある人ならば）恥じ入ってしまう程度のものにすぎない。無味淡泊な脱俗の境地こそが、真に私自身の確乎とした幸福であるのだ。（11・12）私が願うことは、ただひたすらに後悔や過失のないようにして、つまりは（俗塵から遠く離れて）閉じこもってありたいと思うのだ。

【解説】

1・2句目には、具体性を欠いた表現によって、あらかじめ孤立している姿が述べられている。そのような表現は「秋懐詩」其一に「愁憂無端来」とあるのと同様、孤立をもたらすものが焦点化されていないこと、すなわち現実の総体であることを示唆しており、阮籍「詠懐詩」にも通じるものである。それゆえ、明確な対象をもたない「空悲」「虚警」を抱えるのであった。3・4句目では、前句の孤立が視覚（落涙する露）・聴覚（哀悼する虫）にわたって秋の情景に投影されている。そのうえで、5句目以降は、進退の定まらない自己を振り返りつつ、書物をひもとく現在の生活についての矜恃を述べる。身体を小さく折りたたむようにして官界から退いたことも、あるいは社会的栄達を求めて奮励したこともあった。そのような過去を相対化しつつ、7・8句目では、現在の読書生活に満足しているという。それは他者から見れば愚劣な姿かもしれないが、

そこにこそ平穏な生き方があり、そしてその中で、古典文献に次第に習熟してきた実感が得られてきたというのである。ここには、読書人としての立場を選び取った自負が「識」「得」の語によって経験的に語られている。そして9句目以降には、そのような見地に立った自己の心境が、より直接的に吐露されている。それによれば、実態をもたない名声など取るべきではなく、その対極ともいえる無味淡泊な境涯こそが、彼自身の絶対的な幸福であるという。「真自幸」は、自己の評価を明確に強調して述べるものであるが、それは俗塵に対する批判でありつつ、出仕と隠逸とに揺れまどう過去の自分への訣別を意味するものでもある。11・12句目は『論語』に依拠しながら、言行に堅実かつ慎重であることを志向する。それはそのまま、俗塵と隔たって静穏にありたいという願望に結びついている。

本詩は、葛立方『韻語陽秋』が陶淵明「帰去来辞」との類似性を指摘したように、過去の自分と対比しながら、それと訣別した現在の生活を肯定的に述べたものである。実際に、たとえば「帰去来辞」に「帰去来兮。請息交以絶游。世与我而相遺、復駕言兮焉求。悦親戚之情話、楽琴書以消憂」とあることなどは、一部、本詩の詩境と重なるところがある。ただし本詩では、自身の現況や理想について「帰愚」「味薄」など、一見すると否定的な言辞を用いている点に特徴がある。これは、自身の理想を語りつつも、その（自身にとっての）確乎たる価値が決して他者とは折り合わないことを述べており、ここに彼自身の屈折した自己認識があらわれているといえる。

■其六

【原文・訓読】

1今晨不成起　　今晨　起つことを成さず
端坐尽日景　　端坐して　日景を尽くす

虫鳴室幽幽　虫鳴きて　室　幽幽たり
月吐窓冏冏　月吐きて　窓　冏冏たり
5喪懐若迷方　喪懐　方に迷うが若く
浮念劇含梗　浮念　梗を含むより劇し
塵埃慵伺候　塵埃　伺候するに慵ければ
文字浪馳騁　文字　浪りに馳騁す
尚須勉其頑　尚お須らく其の頑を勉むべし
10王事有朝請　王事には　朝請　有らん

【語釈】

○今晨：今朝。○日景：陽光により影のできる時間帯、昼間。○幽幽：暗いさま。『礼記』礼運に「祝嘏辞説、蔵於宗祝巫史、非礼也。是謂幽国」とあり、鄭玄注には「幽、闇也」とある。○月吐：月が現れ出ること。○冏冏：煌々と明るいさま。なお、江淹「雑体詩」には「冏冏秋月明、憑軒詠堯老」との言がある。○喪懐：判断力を失い茫然としているさま。『春秋左氏伝』昭公二十五年に「哀楽而楽哀、皆喪心也」とある。○梗：トゲ、災禍。『毛詩』大雅「桑柔」に「誰生厲階、至今為梗」とあり、毛伝には「梗、病也」とある。○塵埃：俗塵。○浪：みだりに。○朝請：朝廷への出仕。

【現代語訳】

（1・2）今朝、起き上がって部屋から出て行くこともなく、座り込んだままで一日中、太陽の光を浴びていた。（3・4）（そのまま夜になると）虫が鳴くばかりで、部屋は暗くひっそりとしている。（視線を外に向けると）月が現れて、窓の外は煌々と光り輝いている。（5・6）心は茫然として、まるで道に迷っているかのようで、とりとめのない思いがトゲの刺さったように煩わしい。（7・8）俗塵に奔走して、貴顕の者に会いに出かけるのも億劫であるから、（部屋から出ることなく）文

字ばかりをむやみに走らせている。（9・10）それでもなお、自身の頑迷な主張を掲げながら、力を尽くしていかなくてはならない。公務としては、やはり朝廷への出仕ということがあるのだ。

【解説】

1句目～4句目は、自室に閉じこもっていた一日の状況を述べている。ただし、俗塵から隔絶しているものの、それを喜ぶ態度がないという点において「秋懐詩」其五とは色調を異にしている。やがて自堕落に過ごした一日が過ぎ去り、虫の声（聴覚）や月の光（視覚）によって夜の訪れを知ると、それに接するようにして逡巡する内面が開示される。5・6句目は、行き場もなく鬱々とした思いを抱えているさまをいう。現実を拒絶してあることは、必ずしも満足をもたらすものではなかったのである。けれども7・8句目では、この状況を打開するすべがないことを述べる。栄達を求めて世間を奔走するつもりはない。かといって現実を完全に遮断して隠逸するというのでもないから、結果として、読書や著述に没頭することでしか、自身を維持できないのである。「慵」「浪」の語が示すように、ここには自身の行動に対して虚無的に見る様子がうかがえる。また、松本肇「韓愈の「秋懐詩」について」（『文芸言語研究』文芸篇、一三、一九八八年）は「韓愈が著述の世界に没頭すればするほど、それと同じようなボルテージでのしかかる、現実生活の重圧を感じずにはいられなかった」ことを指摘する。あたかも阮籍「詠懐詩」のように、圧倒的な現実を前にしては、そこに回帰せざるを得ないことになるのである。

では、このような隘路を脱却するにはどうすればよいのか。9・10句目には、本詩全体を反転させるかのような内容が述べられている。すなわち、やはり士大夫である以上は公務・出仕ということが使命である、と自身を鼓舞しているのである。これは「秋懐詩」其五の最後部「庶幾遺悔尤、即此是幽屏」と正反対の内容をもつものであり、一見すると、韓愈が現実の官界へ積極的に進出しようとすることを宣言しているかのようでもある。しかし、本詩の主眼はそこにあるのではない。本詩では、現実への貢献を是として自身を奮い立たせようとするほどに、それに背反しながら生きてしまう自己を自責的に述べているからである。士大夫としての理念を了解しながらも一日中を無為に過ごし、「喪懐」や「浮念」に翻弄されて、みだりに読

書や著述に没頭する。しかしそれに充足することはなく、むしろ現実の重圧をことさらに一身に受けることになる。本詩は、そのような堂々巡りの中で現実に対して敗北する自己がある、というよりも、自己がそのようにしかありえない、ということを告白するものであるといえる。

■其七

【原文・訓読】

1 秋夜不可晨　秋夜　晨なるべからず
秋日苦易暗　秋日　苦だ暗くなり易し
我無汲汲志　我に汲汲の志　無ければ
何以有此憾　何を以てか　此の憾み有らん
5 寒鷄空在棲　寒鷄　空しく棲に在り
欠月煩屢瞰　欠月　屢しば瞰るに煩う
有琴具徽絃　琴有り　徽絃を具うるも
再鼓聴愈淡　再び鼓して　聴けば愈いよ淡し
古声久埋滅　古声　久しく埋滅すれば
10 無由見真濫　真濫を見るに由無し
低心逐時趨　心を低くして　時の趨るを逐い
苦勉祇能暫　苦ろに勉むるも　祇だ暫を能くするのみ

有如乗風船　風に乗る船の
一縦不可纜　一たび縦てば纜ぐべからざるが如き有り
15不如覷文字　文字を覷て
丹鉛事点勘　丹鉛もて点勘を事とするに如かず
豈必求贏余　豈に必ずしも贏余を求めんや
所要石与甔　要むる所は石と甔とのみ

【語釈】

○不可晨：夜が長く、なかなか朝を迎えないこと。なお、陸機「挽歌詩」には「広霄何寥廓、大暮安可晨」との言がある。○苦：はなはだ。○易暗：日没が早いこと。○汲汲：あくせくと努めるさま。陶淵明「飲酒」其二十に「汲汲魯中叟、弥縫使其淳」とある。○寒鷄～：『毛詩』王風「君子于役」に「鷄棲於塒、日之夕矣」とある。○具徽絃：弦が調律されてあること。徽は、音程の調節の際に目印となる紐のこと。なお『晋書』隠逸伝・陶潜には「性不解音、而畜素琴一張、絃徽不具、毎朋酒之会、則撫而和之」との言がある。○鼓：演奏する。○古声～：たとえば『礼記』楽記には「今夫古楽、進旅退旅、和正以広。……今夫新楽、進俯退俯、姦声以濫」との言がある。○低心：志を曲げること。○祇能暫：ただしばらくのあいだしかできない。○丹鉛：丹は丹砂、鉛は鉛粉（胡粉）。丹は書き込みを入れる際に用い、鉛は文字を修正する際に用いた。○点勘：点は修正を施すこと、勘は異同を照合すること。○贏余：盈余。余分、余剰。『後漢書』馬援伝には「致求盈余、但自苦耳」との言がある。○石与甔：石は一〇斗、甔は二〇斗。いずれにしてもわずかな俸給をいう。

【現代語訳】

（1・2）秋の夜は（次第に長くなるので）なかなか朝を迎えないが、秋の日は（次第に短くなるので）まことに暗くなりやすい。（3・4）（そうではあるけれど）私にはあくせくと（世に出て働こうと）するような志は持ち合わせていないので、

どうしてこのことに対して恨めしく思うことがあるだろうか。（5・6）寒々しい鶏が、なにをするでもなく巣の中にいて、（満月を過ぎて）欠けはじめた月は、しばしば見上げることさえも物憂く感じられる。（7・8）琴には徽も絃もそなわっていて（音程が調整されているのに）、ふたたび弾いてみると、その音色はますます淡泊であるかに思われる。（9・10）（とはいえ）古代の音楽はかつて衰滅してしまったので（現在に伝わらず）、（それゆえ自身の演奏する音色が）正統なものか、逸脱したものなのか、判断しようにも根拠をもたないでいる。（11・12）（そこで）自身の志を曲げて、時流を追いかけてみようとしても、力を尽くして取り組んだところで、ただしばらくのあいだしかかなわないのだ。（13・14）（時流を追うことは）風を帆に受けた船が、ひとたび岸辺から離れてしまうと、繋ぎとめておくことができなくなってしまうようなものである。（15・16）（結局のところ）文字を観て、丹鉛を用いながら文献を検証することには及ばないのだ。（17・18）（それでも最低限の収入は必要であるが）どうして過分な利益を求めようとするだろうか。必要なものは、わずかに石や甑といった程度の俸給にすぎないのである。

【解説】

1・2句目はまず、秋が深まるにつれて夜明けが遅くなり、日没が早まるという客観的な事態に言及する。そして3・4句目では、自身が奮迅して出仕するような意志を持ち合わせていない以上、日の短さ、つまり活動時間の短さを不満に思うような気持ちがないことを述べて、現実を突き放している。「憾」をもたないのは、現状に満足しているのではなく、あらかじめ現実の社会的枠組から隔絶されていることによる。現実の中に居場所をもたない様子は、続く5・6句目の情景にも重ね合わされている。「寒鶏」は、現実の外に佇む硬直した自己の姿であり、「欠月」は盛時を過ぎて空しく流れゆく時間を示す。そのように孤立した状況の中で、7句目以降には、慰めを求めて琴を弾く姿が描かれる。「琴」は阮籍「詠懐詩」其一に「夜中不能寐、起坐弾鳴琴」とあるように、現実からの逸脱や心の安寧をもたらすものである。ところが、琴は調律されているにもかかわらず、その音色は淡泊で、空々しく響いてしまうのであった。本詩における「淡」の語は、琴の音色が老荘的高踏に合

致しているというのではなく、琴に心を慰めようとしてみても満たされることがない状態を示すものといえる。ところが古代の正統的音楽はつとに消滅しているため、自身の演奏する音楽が実際に正統性を有しているのか、逸脱したものなのか、判断することさえできない。それゆえ琴の音色に満足せず、阮籍のようには慰められないという違和感ばかりが残るのであった。このように超俗の境地になじめずにいる一方、11句目以降では、俗塵への積極的な参与を志向したところで、それもまた長く続かないことを述べる。13・14句目の例によれば、時流に合わせて奔走すると、いつしか自身で進む方向を定めることができなくなり、ひとたびそのように翻弄されてしまうと、二度と立ち止まることさえできなくなるというのである。

15句目以降では、脱俗と現実、そのどちらにも適応できずにいる自己の真に志向するところが述べられる。それは、やはり読書への沈潜というものであった。ここに「丹鉛」「点勘」とあるように、彼の志向する読書とは、文献学的検証をともなうものである。ただし本詩では、それに没頭するのみではない。17・18句目には、最低限の俸給を必要とする旨の発言がある。俸給を拒むでもなく、多くを求めるでもない姿は、隠逸と出仕のいずれにも与しない態度を示すものであるが、本詩では読書への志向を語りつつも、俗塵とつかず離れずに、あたかも調停をはかるかのような姿勢が見えている点に特徴がある。

■其八

【原文・訓読】

1巻巻落地葉　巻巻たり　地に落つる葉
随風走前軒　風に随いて　前軒を走る
鳴声若有意　鳴声　意　有るが若く
顚倒相追奔　顚倒して　相(たが)いに追奔す

5 空堂黄昏暮　空堂　黄昏の暮
我坐黙不言　我　坐して　黙して言わず
童子自外至　童子　外より至り
吹燈当我前　燈を吹きて　我が前に当たる
問我我不応　我に問えども我は応(こた)えず
10 饋我我不餐　我に饋(すす)むれども我は餐(く)らわず
退坐西壁下　退きて西壁の下に坐し
読詩尽数編　詩を読みて　数編を尽くす
作者非今士　作者は今の士に非ず
相去時已千　相い去ること　時　已に千なり
15 其言有感触　其の言　感触すること有りて
使我復悽酸　我をして　復た　悽酸たらしむ
顧謂汝童子　顧みて謂う　汝　童子よ
置書且安眠　書を置きて且(しば)らく安眠せよと
丈人属有念　丈人には属(たま)たま念(おも)うこと有り
20 事業無窮年　事業には　窮まる年　無し

【語釈】

○巻巻：擬態語。くるくる。○前軒：軒先。○空堂：誰もいない部屋。○童子：子供。当時は使用人として置くものであった。○吹燈：灯火を点すこと。ここでは、火を吹き消したのではない。なお『淮南子』説山訓には「或吹火而然、或吹火而

滅、所以吹者異也」との言がある。○当：正対する。○饋：食事をすすめること。○詩：『詩経』所収の詩篇。○感触：感銘を受けること。○悽酸：悲しく痛ましいさま。○且：しばらく。○属有念：属は、たまたま。その場限りであること。鮑照「答客詩」に「幽居属有念、含意未連詞」とある。○事業：『周易』坤卦文言伝に「発於事業」とあり、『周易』繫辞上伝には「挙而措之天下之民、謂之事業」とある。

【現代語訳】

（1・2）くるくると風に舞っては、地に落ちていく葉。風の吹くままに従って、軒先を駆け回っている。（3・4）秋風が落葉を巻き上げる音は、まるで意志をもっているかのようであり、（それに翻弄される落葉は）左に右に反転しては、たがいに追いかけあっているかのようである。（5・6）誰もいない部屋、黄昏時の夕闇。私は一人座り込んだまま、沈黙の中にいて言葉を発することがない。（7・8）そこへ童子が外からやってきて、灯火を点して私の正面に正対した。（9・10）（童子は）私に問いかけるけれども、私は答えることがない。私に食事をすすめるけれども、私は食べることがない。（11・12）（そこで童子は）西側の壁のもとまで退いて座り、『詩経』の詩を読み上げること数篇に及んだ。（13・14）『詩経』の詩篇の制作者たちは、（当然ながら）現代の人物ではない。互いに隔たること、時間はもはや千年に至るほどである。（15・16）（それだけ隔たっているにもかかわらず）童子の読み上げた詩の言葉は（私に）感銘を与えながら、私をふたたび悲しく痛ましい思いに引きずり込んでしまうのであった。（17・18）（そこで私は）振り返って言ったのだった。「君、童子よ。書物を置いて、しばらく穏やかに眠るように」と。（19・20）年長者（である私）には、その時々に応じて考えなくてはならないことがある。（すなわち）事業には終わりの訪れることがないのだ。

【解説】

本詩は「秋懐詩」全十一首においてはじめて他者（童子）が出現して、二人称をともなう表現が成立することを最大の特徴とする。これ以降の各詩には「君」（其九）、「汝」（其十）、「爾」（其十一）とあり、そのような表現はこれまでに見えないことか

ら、これらは意図的に構成・配列されたものと考えられる。かかる構成において、最初に二人称を有するのが本詩である。

1句目～4句目は、秋風に巻き上げられた落葉の姿を描写している。落葉は自力で運動するものではなく、それゆえ翻弄されるままにある生の姿を示している。そしてそれらを吹き上げる秋風は力強く、まるで意志をもっているかのように鳴り響いている。左右に一斉に揺動しながら、たがいに追いかけあう落葉は、あたかも時代の風を受けて雷同する人士たちのようである。続けて5句目以降では、そのような世間のざわめきを外にしながら、対称的に静謐な時間・空間が提示される。黄昏時、誰もいない部屋に一人座り込んで沈黙するさまは、俗塵と隔絶されてある自己の清高な内面を映し出すものである。そしてそのような自己完結を破るかのようにして出現するのが、灯火を携えた童子であった。この童子が実際の使用人であるか、あるいは仮構されたものか、それは必ずしも明らかではない。ただいずれにしても、ここでは他者の出現により、自己の内面を相対化するものが予期されているのである。ところが、灯火に照らされた両者は、さしあたって正面に対峙しながらも語り合うことがなかった。9・10句目においては、童子がまるで不在であるかのような光景が述べられる。実際には、童子は「我」に語りかけ、食事をすすめているのだが、これに対する応答がなく、両者の世界が交錯することはなかったのである。そこで童子は壁際まで退いて、一人『詩経』の詩篇を読み上げはじめた。それらは千年前の古典であり、知識人にとって必須の教養でもある。したがってこれらを朗誦する童子は、読書生活の理想を体現する存在であるといえる。ところが、15・16句目が示すように、童子の朗誦する詩篇に感銘を受けつつも、それを聞く「我」自身は悽酸な思いにとらわれることになるのであった。これは『詩経』の詩句に感じて、その悲哀にいたたまれなくなり、それ以上聞き続けることができなくなった、ということである。そしてこれにより、続く17・18句目において、はじめて自身が言葉を発することになる。その内容は、童子に読書を止めて眠るように要請するものであった。このことは、自身が読書への沈潜を志向しつつも、実際にその理想を体現する存在を前にして、そのようにあることができない、という自己認識を吐露するものである。この発言において「汝」字が用いられるように、ここでの童子は理想でありつつも、絶対的な他者として、自己と断絶した存在である。したがって自身はもはや、

童子のように古典を朗誦しながら純粋に古人に連なることができない――読書への沈潜がかなわない、というのである。ここでの発言は、そのような意味をもつものであった。そして最後に19・20句目では、童子との断絶を経た自身の胸懐が述べられる。それによれば、やはり現実の状況に応じて、その場その場で果たさなければならないことがあるという。その志向するところは、『周易』にもとづきつつ、現実的効用をもつ「事業」の語に集約されている。

本詩はまず、現実のざわめきを発端として、そこから隔絶した静穏な自己を述べる。しかし、彼の志向する読書生活を体現する他者の出現により、そのようにあることのできない自己を自覚するに至り、現実へと回帰してゆく意志を示す、そのような構造を有している。その際に「童子」が登場し、それに対して二人称で呼びかける点は、「秋懐詩」全十一首において最大の特徴をなすものであるが、その二人称とは、他者とともにあるためではなく、むしろ他者と断絶することで、そのようにあることのできない自己を鮮明にする、そのような機能をもつものであった。

■其九

【原文・訓読】

1 霜風侵梧桐　　霜風　梧桐を侵せば
　衆葉著樹乾　　衆葉　樹に著(つ)きて乾く
　空階一片下　　空階に一片　下(お)つれば
　琤若摧琅玕　　琤として琅玕を摧(くだ)くが若し
5 謂是夜気滅　　謂(おも)えらく是れ　夜気の滅するは
　望舒霣其團　　望舒　其の團を霣(おと)せばなり

青冥無依倚　青冥　依倚すること無く
飛轍危難安　飛轍　危うくして安んじ難しと
驚起出戸視　驚き起ち（た）て　戸を出でて視て
10倚楹久汍瀾　楹に倚りて　久しく汍瀾たり
憂愁費晷景　憂愁　晷景を費やし
日月如跳丸　日月　跳丸の如し
迷復不計遠　迷復　遠きを計らず
為君駐塵鞍　君が為に塵鞍を駐（とど）めん

【語釈】

○霜風：冷たく厳しい風。○梧桐：アオギリ。落葉樹。○著樹乾：葉が樹上にあるままに枯れてしまうことをいう。○空階：誰もいない階段。○琤：玉のふれあう音。○琅玕：宝玉。『尚書』禹貢に「厥貢惟球・琳・琅玕」とある。○夜気：夜明け前の清涼な気。『孟子』告子上に「梏之反覆、則其夜気不足以存。夜気不足以存、則其違禽獣不遠矣」とある。○望舒：月の御者。『楚辞』離騒に「前望舒使先駆兮、後飛廉使奔属」とある。○霣：落とす、降り注ぐ。『春秋公羊伝』荘公七年に「恒星不見、夜中星霣如雨」とある。○團：球体。ここでは月を指す。○青冥：青空。『楚辞』九章「悲回風」に「抛青冥而摭虹兮、遂儵忽而捫天」とある。○飛轍：月の軌道。○楹：柱。○汍瀾：涙を流すさま。欧陽建「臨終詩」に「執紙五情塞、揮筆涕汍瀾」とある。○晷景：日の影、時間。なお張衡「西京賦」には「白日未及移其晷、已獮其什七八」との言がある。○跳丸：お手玉。○迷復〜：『周易』復卦上六爻辞に「迷復、凶、有災眚」とあり、初九爻辞には「不遠復、无祇悔、元吉」とある。○塵鞍：粗末な鞍。

【現代語訳】

（1・2）冷たく厳しい晩秋の風が、（夏に茂っていた）アオギリの樹を侵食すると、その葉は樹上にあるままに（枯れて）乾いてしまうことになる。（3・4）誰もいない階段に、その乾いた一片の葉が落ちてくると、チンと音を立てながら、まるで宝玉を打ち砕いたかのようであった。（5・6）（その音に導かれて）思うことには、ここに夜明け前の清涼な気が消え去って（暗転して）しまったのは、（月の御者である）望舒が（天空から）月を落としてしまったためであろう。（7・8）蒼々とした空にはもとより拠りどころとするところがなく、月の軌道が不安定になってしまい、平衡を失って落ちてきたのではないか、と。（9・10）（そうして月が落ちてきたと思いこんで）驚いて思わず立ち上がり、扉から出て見上げてみる（と月は落ちていなかったのだ）。（しかし心の動揺のままに）柱に寄りかかって、ひとしきり涙を流すばかりであった。（11・12）（そもそも私の抱えている）憂愁なる思いは、日々絶え間なく続くものであるが、太陽と月もまた（私の憂愁とは関わらずに）お手玉のように（代わる代わる）空中に放たれては落ちることを繰り返している。（13・14）帰還するところに迷うのならば、遠大なことを考えたりはしないものだ。君のために粗末な鞍（をつけた馬）を駐めて、しばらくはここにとどまることにしよう。

【解説】

1・2句目は、晩秋の水気を含んだ冷たい風がアオギリに吹きつけるさまを述べている。『楚辞』九辯以来、秋風と落葉を描くことは常套的であるが、ここでは、アオギリの葉が枝についたまま枯れている点に表現上の新奇性がある。3・4句目は、一枚の葉が階段へ落ちる音を契機として、それが宝玉を砕くような音であると連想する。そしてそのような聴覚的連想をもとに、続く5句目～8句目では、さらなる想像を繰り広げている。それは、この音が望舒によって、月を地上に落としたことで鳴り響いた、とするものであった。そしてさらには、そもそも天空には月を支えるものがなく、軌道が安定しないという。これは宇宙的規模において展開される突飛な発想であるが、幻想的でありながら、それでもなお因果関係を理知的に述べ

ようとするところに特色がある。しかし実際に見上げてみると、当然そのような事実はなく、月はありありと夜空に浮かんでいるのであった。

11句目以降には、一瞬の想像から日常に回帰した際の胸懐が述べられている。とりとめのない「憂愁」は平生のものであり、日月もまた絶えず運行している。だからこそ、月が落下する事態を想像しては、自身の「憂愁」にも変化が訪れることを期待したのであった。しかし、そもそも両者は関与していないのである。13・14句目は『周易』にもとづきながら、遠大なことを志向せずに、その場に停留することを肯定する視座を提起する。所在に迷いつつ現状のままにある自己を、ひとまずはそれでよいとするのである。その際本詩では、二人称「君」を用いて自己を客体化させることで、その葛藤を含めて甘受しようとする意志を明確に示すのであった。

■其十

【原文・訓読】

1暮暗来客去　暮暗　来客　去りて
　羣囂各収声　羣囂　各おの　声を収む
　悠悠偃宵寂　悠悠として　宵の寂なるに偃し
　亹亹抱秋明　亹亹として　秋の明なるを抱く
5世累忽進慮　世累　忽ち慮に進み
　外憂遂侵誠　外憂　遂に誠を侵す
　強懐張不満　強懐　張れども満たず

弱念欠已盈　弱念　欠くれども已に盈ちたり
詰屈避語穽　詰屈として　語穽を避け
10冥茫触心兵　冥茫として　心兵に触る
敗虞千金棄　敗れては千金の棄つるを虞(おそ)れ
得比寸草栄　得ては　寸草の栄に比す
知恥足為勇　恥を知るは　勇を為すに足る
晏然誰汝令　晏然たれば　誰か汝を令せん

【語釈】

○羣囂：群動。○悠悠：ゆったりとしたさま。○偃：横たわること。○亹亹：絶えず引き続いているさま。『楚辞』九辯に「時亹亹而過中兮、蹇淹留而無成」とあり、また「事亹亹而覬進兮、蹇淹留而躊躇」とある。○世累：世俗の煩わしさ。俗塵。○外憂：外部からもたらされた憂い。世累と類義。○誠：精神の集中しているさま。○詰屈：まがりくねっているさま。○語穽：言葉に関する陥穽。舌禍。○冥茫：茫漠としたさま。郭璞「遊仙詩」に「遐邈冥茫中、俯視令人哀」とある。○心兵：心に思い煩うこと。『呂氏春秋』孟秋紀・蕩兵に「在心而未発、兵也」とある。○千金棄：『荘子』山木に「林回棄千金之璧、負赤子而趨。或曰、為其布与。赤子之布寡矣。為其累与。赤子之累多矣。棄千金之璧、負赤子而趨、何也。林回曰、彼以利合、此以天属也」とある。○栄：花開くこと。○知恥足為勇：『礼記』中庸に「好学近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇」とある。○晏然：安らかなさま。

【現代語訳】

（1・2）日が落ちて暗くなり、客人も帰ったので、さまざまなざわめきが、それぞれの音を収束させてゆく。（3・4）（私は）ゆったりとした心持ちで、夜の静寂の中に横たわり、飽きることもなく、秋の夜の月光を一身に抱え込んでいる。

（5・6）（そのような時間であってさえ）世俗の煩わしさが、にわかに私の思索の中に入り込んできて、外界からもたらされた憂いが、あろうことか私の集中している精神を侵食してしまうのであった。（7・8）（それに対抗すべく）強固に自己を保とうとする気持ちをみなぎらせようとするのであるが、充分ではなく、（世俗に迎合する）薄弱な思いを減退させようとしても、またしても満ちてきてしまうのである。（9・10）（そこでいっそのこと）自身の志を曲げて、舌禍を回避しながら妥協的に生きようとすれば、ただぼんやりとして、心のわだかまりに触れることしかできなくなる。（11・12）（そのような生き方であれば）危難の直面したときにさえ（林回の故事のように）価値の高い宝玉を棄てることをためらってしまい、成功を得たとしても、小さな草が花開いた程度のささやかなものにすぎなくなってしまう。（13・14）ただ恥を知ることが自身に残っているならば、自らを鼓舞して自己を保つことができる。（そうすれば）安らかな境地にあって、誰も君を使役することなどできないのだ。

【解説】

1句目～4句目は、静穏な秋の夜の状況を述べている。来客が去り、夜になって喧噪が徐々に静まりかえる様子は、本詩が他者の不在を起点とすることを示唆している。その中にあって、悠然と横たわりながら月光を一身に浴びているのは、他者の介在することのない完全な自己充足であり、本来的な自己を獲得している姿である。ここにはこのような、完結した空間がある。ところが5・6句目に「世累」「外憂」とあるように、充実した時間はまたしても他者に夾雑されてしまう。「世」「外」は、いずれも具体的に言及されないように、現実の全体を抽象化して述べたものである。7・8句目では、そのような障害に対抗するため、自身の内面をより頑健に維持しようと奮起するのであるが、結果的に敗北してしまうことをいう。現実の総体に圧倒されることにより、本来的な自己は損なわれ、喪失してしまうのであった。

9句目以降では、本来的な自己の危機に際しての葛藤が述べられている。もしも世俗に妥協して迎合的な生き方を選ぶならば、内心にわだかまりを抱えつつも、本来的自己に背くことになる。そしてそのようであれば、危難に際して適切な判断が

できなくなり、仮に成功を収めたとしても瑣末な成果にすぎなくなってしまう。『荘子』山木において、林回が宝玉を棄て、赤子を背負って逃走したのは、利害に眩まずに天与の関係性を選び取ることができたためであった。この故事に対して本詩では、時流に従ってしまうことは、人としての基本的判断すら忽せになってしまうと危惧しているのであった。そこで13・14句目では『礼記』中庸にもとづきながら「知恥」の重要性を述べる。これは「秋懐詩」其五に「名浮猶有恥」とあることと通じるものである。本詩では俗塵を「恥」と見なすほどの高潔な精神性を自ら誇り、鼓舞しているのであった。そしてそのような自己は安定的であって、もはや他者に翻弄されることがない。そのことを本詩では二人称「汝」を用いながら、客体化して述べている。当然ながら、これは自己と世俗との距離を強調して示すための用法であるが、ここでは単なる断絶を意味するものではない。むしろ世俗に対して自立的であることの矜恃を述べたものといえる。そのようにして本詩では、ひとたび危機に瀕した本来的自己を回復し、俗塵を克服する、そのような境涯が述べられているのである。

■其十一

【原文・訓読】

1 鮮鮮霜中菊　鮮鮮たり　霜中の菊
既晩何用好　既に晩くして　何を用てか好し
揚揚弄芳蝶　揚揚たり　芳を弄するの蝶
爾生還不早　爾が生　還た早からず
5 運窮両値遇　運　窮まりて　両つながら値遇し
婉孌死相保　婉孌として　死するまで相い保つ

西風蟄龍蛇　西風は　龍蛇を蟄し
衆木日凋槁　衆木　日(ひび)に凋槁す
由来命分爾　由来　命分　爾(しか)り
10泯滅豈足道　泯滅　豈に道(い)うに足らん

【語釈】

○鮮鮮：あざやかなさま。○既晩：すでに咲くべき時機を逸してしまったことをいう。○揚揚：（意のままに）飛び回っているさま。『説文解字』に「揚、飛挙也」とある。○弄：戯れること。○不早：晩年にさしかかっていることをいう。○両：菊と蝶を指す。○値遇：出逢うこと。○婉孌：たがいにまつわりつくさま。なお『毛詩』斉風「甫田」には「婉兮孌兮、總角丱兮」とあり、鄭箋に「婉孌、少好貌」とある。○蟄龍蛇：『周易』繫辞下伝に「尺蠖之屈、以求信也。龍蛇之蟄、以存身也」とある。○凋槁：枯れ萎む。○命分：天に命ぜられた分。○泯滅：死没すること。

【現代語訳】

（1・2）鮮やかに花開いている、霜の中に咲いた（季節外れの）菊。すでにふさわしい時節は去ったというのに、どうしてこんなにも美しく咲き誇っているのだろう。（3・4）ひらひらと飛び回っている、（菊花の）香りにたわむれている蝶。君の命も、もはや晩年にさしかかっていよう。（5・6）命運が窮まって（死期が近づいてから）、両者は出逢ったのだ。（そして）親しくまつわりつきながら、死に至るまで互いにそのまま離れることはない。（7・8）西風が起こり、爬虫類たちは地中へ潜っていった。（そして）木々は日を追うごとに、萎み枯れてしまった。（9・10）そのような（季節が動いてゆく）ことも また、天命によるものであるのだ。（そうであるならば）絶命してしまうことも（同様なのだから）、そこに言葉を差しはさむ必要はあるまい。

【解説】

本詩は、霜の降りた晩秋～初冬の光景を描くものである。1・2句目は、霜の中に咲いた季節外れの菊花が、時機を逸しているにもかかわらず、すぐれた資質を発揮していることを述べる。3・4句目は、その菊花の周囲にたわむれる蝶に対して、「爾」字を用いながら、その生命も尽きかけていることをいう。なお、松本肇「韓愈の「秋懐詩」について」（前掲）は、蝶を韓愈の分身とする見方を提示している。5・6句目には両者の睦まじいさまが述べられるが、そもそもそれらは死を前提とする関係である。限られた時間だからこそ、その時間を惜しみあっているのである。7句目以降では、季節がめぐり、やがて絶命することもまた天命によるのであるから、そこに言葉を差しはさむこともない、と運命を受容する態度を示している。運命を前にしては、言葉を用いて判断をくわえることなど、とても意味をなさないというのである。「秋懐詩」其一「浮生雖多塗、趨死惟一軌」には、人間の有限性が述べられ、それに対する諦念が示されていた。そしてその諦念は「胡為浪自苦、得酒且歓喜」（「秋懐詩」其一）とあるように、かりそめの日常的快楽の中に埋没させるほかになかった。しかし本詩では、死すら天命として受容する姿勢が見えているのである。このことは、本連作詩においてさまざまに述べられてきた出仕／隠逸の対立や、読書への志向とその破綻、そして彷徨する自己というようなあらゆる葛藤を最終的な局面において解消するかのようでもある。

なお、本詩は「秋懐詩」全十一首の最後に位置しており、寓話的内容をもつ点に特徴がある。それゆえ本連作詩にあっては、コーダ（終結部）的部位をなすものといえる。

Ⅱ　秋懐の系譜――阮籍・韓愈・魯迅――

牧角悦子

「Ⅰ」において提示した和久の「秋懐詩」の詳細な分析を踏まえた上で、ここでは少し異なる視点から韓愈の「秋懐詩」を

語ってみたい。それは、中国古典詩の史的展開の中で、いくつかのモチーフが、或いは継承され或いは変容しつつも受け継がれて行く、その様相についてである。具体的には、「秋懐詩」にみえる「秋の憂い」が六朝の阮籍の「詠懐詩」の継承としてあることが一つ、そして「秋懐詩」に詠われる「二本の樹木」というものが近代の魯迅の小説への影響を持つことが一つである。長い時間的蓄積を持つ中国の古典の継承の中で、一つのテーマやモチーフが、時代を超えてその内実を醞釀させていく、その一端を紹介したい。

一、韓愈「秋懐詩」其一

まず、韓愈「秋懐詩」の最初の一首の拙訳を掲げよう。

牕前両好樹　窓辺に好ましげな樹木が二本
衆葉光蕤蕤　茂る葉に密に籠る光
秋風一披払　ひとたび秋風が枝を吹き払うと
策策鳴不已　サワサワと已(や)むことなく声をあげる
微燈照空牀　夜中　今にも消えそうな燈火に照らされた一人寝のベッド
夜半偏入耳　私の耳にその音だけがひたすら入る
愁憂無端来　うれいの思いがわけも無く湧き上がり
感歎成坐起　私は大きく息を吐いて端坐する
天明視顔色　夜が明けて様子を見ると
与故不相似　以前とはまるで変った姿

羲和駆日月　羲和は日月を駆り立てて
疾急不可恃　休むことなく疾走させるのだ
浮世雖多塗　この世に営む多岐なる道も
趨死惟一軌　全ては最後に死に行き着くもの
胡為浪自苦　ならば　いたずらに自らを苦しめることなく
得酒且歓喜　酒を飲み　しばし歓喜に身をまかせよう

「秋懐詩」の第一首は、秋風が鳴らす葉音によって呼び覚まされた憂愁に、眠れぬ夜を明かす心の内を詠む。後半は、秋風に吹き荒らされて一変した樹木の姿に、一方的に過ぎ去る日月の縮図を目の当たりにして、死に向かうばかりの浮世の定めを見据える。しかしそこでこの詩は諦観には向かわず、「自苦（自分で自分を苦しめる）」を止めて「歓喜」を求めよう、と自らを励ますのである。

この詩の特徴は、「何を歌っているのか」にではなく、「どのように歌っているのか」に在る。それは、抒情とも叙事とも異なる叙述的語りなのである。「窓」「樹木」「風」という小風物と、夜から朝に至る時間の推移とが、ストーリーの中に描かれる。そしてその描かれる物と事とが、日月を馳せる羲和の疾走の中に凝縮し、それが浮世の儚さと対項する。この一見即物的なストーリー展開全体から醸し出される情緒こそ、詩題の「秋懐」の内実であり、その秋懐はおそらく「自苦」を止めて「歓喜」しよう、という末句の結束にもかかわらず、詠うごとに増幅され、余韻としてこの詩の読後に漂う。しかしそれらは五言という定形で「詩」として表現される時、抒情や象徴を超えた一つの力を読む者に実感させる。抽象的な秋懐が、言葉に昇華されて独自の世界を形づくるのだ。

韓愈詩の魅力は抒情性にはない。叙景や象徴といった詩というものが本来的に持つ言葉としての異次元性に拠る働きとは全

く別の何かが、韓愈詩にはある。恐らくそれは、現実の直視、体当たりの実感からしか生まれ得ない生の感覚を、具象的な言葉によって語る、その言語世界の持つ魅力なのだろう。秋風に揺られて鳴き止まぬ二本の良き樹木を描くのみのこの詩は、人生の抱え込む衆多の憂愁と、詩の持つ無限性とを我々に力強く提示する。「文」というものが力をもって人にはたらくことを、その生き方と言語世界の双方で顕現した人物が韓愈であった。韓愈を「文公」と諡する所以である。

二、阮籍「詠懐詩」其一

ところで、「秋の憂い」を五言詩で詠うのは韓愈の独創ではない。「秋懐詩」が六朝の阮籍（二一〇―二六三）「詠懐詩」の大きな影響下にあることは、既に上文で和久が指摘する通りである。阮籍の詩を以下に挙げよう。

阮籍　詠懐詩　其一

夜中不能寐　真夜中に眠ることが出来ず
起坐弾鳴琴　起き上がって琴を掻き鳴らす
薄帷鑑明月　薄い帷に満月が光を投げかけ
清風吹我襟　すずやかな風が私の襟元を吹きすぎる
孤雁号外野　群れから離れた一羽の雁が荒野に叫び
朔鳥鳴北林　北の国からやってきた鳥が北の林に鳴く
徘徊将何見　何かを捜すわけでもなくあても無くさまよう私の心を
憂思独傷心　憂いの思いがただ傷つけるのだ

阮籍の「詠懐詩」は、詩という表現形態が大きく変化する転機となった重要な作品である。漢代以前において詩は、『詩経』の伝統を受け継ぎつつ、主に儀式や公の場での公共的性格を強く持つものであった。王朝の賛美や現実の風諭という儒教的価値を、詩はいつも背負わされていたのだ。風物によって喚起された情や個別の思いを詩で詠う、今でいえばあたりまえの抒情詩は、阮籍以前の詩にはほぼ無かったと言ってよい。阮籍のこの詩が殊更に「詠懐」と呼ばれるのは、詩というものがそもそも詠懐すなわち心の内を詠うものではなかったことを端的に表している。

韓愈は明らかに阮籍の「詠懐詩」を意識しながら「秋懐詩」を詠んでいる。しかし、阮籍の「詠懐詩」が、夜中の孤独を「孤雁」と「朔鳥」の鳴き声によって導き、謂れのない憂いによって徘徊し心を傷める、と詠うのに対して、韓愈「秋懐詩」は、自ら心を傷めることを否定し、憂いを憂いとして客観化しようとする。秋の憂いを詠うという主題を受け継ぎながらも、ここには新しい展開があるのだ。

更に、阮籍詩には無い一つのモチーフとして、「秋懐詩」には二本の樹木が詠われることに注目したい。窓越しに見える「両好樹」には、光を含んで密に重なる多くの葉が茂っている。韓愈は好んで「好」という言葉を使うのだが、これは外見の美しさを客観的に言う形容詞ではなく、対象物の内面的な価値に対する主観的な好ましさを表す。それが何の樹木なのかを明示することなく、多くの葉をつけた二本の好ましげな樹木を、韓愈は詩の冒頭に描くのだ。

それは、実際に詩人の窓辺に見えた二本の樹木なのかもしれない。或は韓愈の詩に度々詠われる二者一対の「歌うもの」の形象であるのかもしれない。杜甫と李白という二人の詩人を新しい「詩人」として評価し、現実とは異なる次元での言語空間の創造をダイナミックに歌う「双鳥」詩や「調張籍」詩には、二者一対の詩人の存在が、想像性豊かに描かれるからだ。二者一対の表現を好んで用いる韓愈だが、「秋懐詩」其一において二本の樹は、象徴というよりはむしろ一つの光景として叙景的に描かれることで、読む者に大きな印象を残す。

この印象を、そのまま自己の散文詩に掬い取ったのが魯迅であった。魯迅『野草』「秋夜」はまた、二本の樹木の形容から

始まるのだ。

三、魯迅「秋夜」

様々な小説形態を残した魯迅だが、なかでも散文詩『野草』は難解な事で知られる。その『野草』の第一篇である「秋夜」は、二本の樹木の描写から始まる。

私の住まいの後ろの庭に、壁越に二本の木が見える。一本は棗の木であり、もう一本も棗の木である。見上げると夜の空は、奇妙なほど高く、ふだんこんなに奇妙に高い空は見たことが無い。それはまるで人の世を避けて去り、人々が見上げても二度と見えないことを求めているかのようだ。しかしいま空はかえってとても青く、キラキラと数十個の星々の瞳の冷たい眼差しを輝かせる。その口元に微笑みが現われる。何か大きな意味ありげに。そしてそれは繁霜となって私の庭の野生の草花の上に降り注ぐだろう。……

在我的後園、可以看見牆外有兩株樹。一株是棗樹、還有一株也是棗樹。
這上面的夜的天空、奇怪而高。我平生沒有見過這樣的奇怪而高的天空。他仿佛要離開人間而去、使人們仰面不再看見。
然而現在却非常之藍、閃閃地睒著幾十個星星的眼、冷眼。他的口角上現出微笑、似乎自以為大有深意、而將繁霜灑在我的園裏的野花草上。……

魯迅の「秋夜」は、二本の棗の木の存在を背景に、地上に生える夢見る野草の幻想を、現実と未来の狭間に描く短編である。二本の樹木はここでは棗という具体的な名称を持つことで、韓愈詩よりも情景が具体化される。しかし「秋夜」の中心は

むしろ地上の野草とそれを見下ろす空、そして夜の経過の描写にある。そこに敢えて二本の棗の樹木を登場させること、そしてまた舞台が秋の夜であることには意味がある。散文詩という表現、複雑な思想のテクニカルな表現において近代的味付けを施しながら、魯迅の「秋夜」は確実に韓愈「秋懐詩」に基づくのだ。

魯迅の小説は中国の古典を様々に踏まえながら展開されるものが多い。それは例えば『故事新編』が文字通り故事の翻案であるだけでなく、『吶喊』や『野草』に収められた小説もまた、六朝から唐代にかけての詩や小説、故事から多くの養分を吸収している。古典と強く繋がりながら展開される魯迅の小説に、「秋懐詩」のテーマ・モチーフは明らかに受け継がれている。

魯迅と韓愈が繋がる、というと一見唐突に思えるかもしれないが、そうではない。中国近代の詩人であり古典研究者であった聞一多（一八九九－一九四六）は、魯迅の追悼講演の中で魯迅と韓愈の類似について以下のように語っている。

> 文学史上の人物の中で、我々を最も長く深く支配し、戦闘的・反抗的態度に駆り立てる者、そしてその人について、その文章よりも人格への想いを起こさせる者は誰かというと、それは韓愈である。唐代の韓愈と現代の魯迅は、ともに文章以外に、国家や民族の長い前途を見据えた人たちである。彼らは人に、良いことをしろと勧めなかった。代わりに、悪事を敢えて行わないように大声で叫んだ。彼らの態度は文人の態度であって詩人のそれではない、と言うべきであろう。
>
> （「清華副刊」45・1『聞一多年譜長編』1936年10月24日の項に引用）

> 在中國文學史上的人物中、支配我們最久最深刻、取得一種戰鬥反抗的態度、使我們一想到他不想到他的文章而想到他的人物的、是誰呢。是韓愈。唐代的韓愈跟現代的魯迅都是除了文章以外、還要顧及到國家民族永遠的前途。他們不勸人做好事、而是罵人叫人家不敢做壞事。他們的態度可說是文人的態度而不是詩人的態度。

聞一多はここで、魯迅と韓愈とが文人としての態度において共通するという。聞一多が彼らに対して「詩人ではなく文人」という表現を使うのは、近代の新詩と呼ばれる分野をリードした立場から、近代的な詩と古典的な詩の違いを背景に発した言葉であるが、むしろ注目したいのは、文人的価値、それは長い中国文化の背景を持つエリートの矜持としての「文」意識なのだが、それを韓愈から直接魯迅に結び付けていることである。魯迅が継承したのは、韓愈詩のテーマやモチーフのみでなく、中国伝統の文人的生き方と表現だったことを、聞一多のこの言葉は語っている。

おわりに

長い中国文化の歴史と、そこに存在した数多くの文人・詩人の中で、韓愈は特別な存在である。その韓愈の多くの著作の中で、ここで取り上げた「秋懐詩」はまた特別な意味を持つ。韓愈自身にとってそれが特別な意味を持ったと同時に、また中国文学史においても同様である。本稿は、牧角と和久の両人が、それぞれの興味と方法で、韓愈に向き合うための第一歩を、この「秋懐詩」をめぐって提示してみたものである。ここから我々も更に個別のテーマについて論じることを始めたいと思っている。同時に我々が生きた現場としてこれらを講じた受講生たちが、それぞれの興味と方法で韓愈の魅力を論じることを始めてくれることを期待したい。